

西遊傳
信

118
572
5



13
572
5

西山遺文卷九

參議從三位行右近衛權中將兼左衛門督

水戶候源朝臣光圀

從四位行左近衛權少將

水戶世子源朝臣綱方

寬文^{シテ}祭年^{ホシ}歲次^{ホシ}丁未^{ホシ}拾二月穀旦建夫鐘者所^レ臣

警^{コト}君臣之逸^{コト}豫而鼓^{コト}勸^{コト}上下於明作者也洪鐘聲

勤遠通咸聞通天子諸侯興^シ求^レ衣^ヲ同治之思孤

鄉百僚振^ラ佩玉鳴騶之度^ヲ賢^シ妃不必^シ塵^ヲ會^ハ歸

大正十五年二月
花房仙太郎氏

之憎君手工不必聽絳情之籌為益弘已是故
天子之都臣及侯封宮省矚庠省會莫不建焉下
而郡邑莫不建焉况水戶大邦哉今水戶侯參議公
好學博古知此為邦家重器君民之急需於是鎔精
金臣鑄之懸於城中臣警有位臣警庶士庶民臣
警庶人之在官者而先臣自警其志亦大矣持
其制度之長短大小拿哆声音之寇亮悠揚清
咽平揣輕重未必盡協然而鐘虛不移夫故物
勤民蚤戒夙興他日之為効豈淺鮮哉

銘曰

天開地闢 斯鐘則鳴 萬籟猶寂 錫錫震警
宵衣求治 噦々鸞衡 君曰咨爾 如何民生
臣曰吁哉 王田氏情 文王追蠹 遙駿有聲
遙求厥寧 遙觀厥成 垂謨萬禩 永勒鳴名
明遺民餘姚 朱之瑜頓首并撰

從五位下行備前守丹治真人信治

水戶侯國執政諸臣

從五位下行土佐守源朝臣義堅

從五位下行石見守源朝臣重政

一 香姫君一と勢なりけりかしと種を種へて百ありとてくるととて思ひ
るるなりけり
あつて可なり早速唐舞とて二つ二つと前を
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて

一 伊妹君知川知中守知利知直知城知住知の知福知の知所知
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて

一 伊妹君知川知中守知利知直知城知住知の知福知の知所知
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて
あつての間にあつてまゝとせむと涼の涼の曲を吹かせるも枯れとて

一 或年南蠻人鳥と枯しい馬火と管し入と名す
西山云々わそ蛇馬と云ふこと行々

一 或者伊預の序より上る洲に世より胡椒の木と持々の
事ありて一と云ふ一と云ふ胡椒山椒を種多し
或を毒らまはる毒ありたり味と種と一と云ふ
の中ふむと云ふ一と云ふ治并よ辛味す一と云ふ果
こぼらん

一 西山云 黃瓜と名す胡椒と云ふ胡椒と云ふ胡椒と云ふ
言一と云ふ胡椒と名す一と云ふ又毒多し能く一と云ふ

一 一と云ふ胡椒と名す一と云ふ胡椒と名す一と云ふ胡椒と名す

一 西山云む一と云ふ胡椒と名す一と云ふ胡椒と名す一と云ふ胡椒と名す
名す一と云ふ胡椒と名す一と云ふ胡椒と名す一と云ふ胡椒と名す
一と云ふ胡椒と名す一と云ふ胡椒と名す一と云ふ胡椒と名す
一と云ふ胡椒と名す一と云ふ胡椒と名す一と云ふ胡椒と名す

車の新

羽祥人冬 薩摩人冬 菜

葵 口ウサ 唐千廿 落花生

唐鬼灯

ケシヤウ草

唐千廿

唐芥子 カウシ

ハラスニシイ十

ヘシルウグダ 一名ヘシルウグダ 俗にウグダウ

糸蓮花

戸蓮 名曰

蓴菜 水名物下名蓴菜 西の海又中流に大南都蓴菜類

のね

着淋菜 津島より西の山中

濱中綿 桐葉の厚よりしとも入る所取ては信色蓮と一ヤキ事

黒葡萄

匏橋 ガ

日陰蔓

ツノ蓮花

鳥芥 名曰

南都蓴菜類

眼赤

阿茶陀芥子

細糸芥子

草蓮花

蓮系蓮

ブツカウ草

竹首鳥

洗布 松の油より出た名 松の油は油類

木の乳

御飯早梅 名曰津島水

江南所 名曰

シテ辛夷 エ

紀別熊野松

柚山椒 名曰柚の葉の内 山椒の葉の内

ソナシ松

カキト 鄭湯

カキウ

玉團

木犀 又名カシ木

沙羅雙樹

佛手柑

楡椀

戸椀

カシヤノ木

果木子

黒梅

菩提樹

西棗

楸毒

みょう椒

白木蓮

メイサ

木槵子

楊梅

金庫梅槍

右白梅

大敬堂柚

三テハ推

巴旦杏 ハタニキウロ

桐油木 ツツジ

竜眼肉

桐 信房桐

新花椰子

梅槍

咬啣吧梅

岩梨

白輪梅子

唐川練子

香徳 能経毒を

护 一名山際俗ハセキ本護利ヨリま室をうりし
本をうり用し
常若又ハ名ボウ

リロウブ 京都少名一石

藤松

洲草

記瓦梅

赤梨

玄花果

鉄樹

唐物把

撞桐竹

肉桂

キンメイ竹 ツツジ

栗木

申鹿 サタウツメ

瓢木 瓢木

胡椒

虎生竹

虫の乳

田畦 新小舟もろろあかきりめ一糸一夏之高の心もたれん之行道列種行の
をさすりまゆりてはせれらるり 中山のまきとさきこも運在中のてあつて
たぬへし秋の末の初に整へてさきこもたれん之行道列種行の
りたつてあつてはせれらるり 中山のまきとさきこも運在中のてあつて
りたつてあつてはせれらるり 中山のまきとさきこも運在中のてあつて

蜜蜂

人魚の乳

蜜 字後の蜜はあまの
はくしりから

蛤 ういこ回

水 俗ニカノ又カノ水

海冬 冬ノ水

禽の乳

孔雀

鶺鴒 たりの子

錦鶏

鶺鴒 一君ハコ

サトウ鳥

鳩クハシ鳥

鯨魚 ウシノイサナ

白臭

チノコトハシト云フ

鯨

青鸚

ウツクシ

白鸚

鸚

五色鸚 又雀鸚

鴉

島鴨

高麗雉子

テウセウ鳩 俗テウセ

キノウ鳥

鶺鴒

紅雀

鶺鴒 口の中を食ハト

鶺鴒 トリスケイ

吐鷄

獣の乳

鹿章 鹿ノ章

山猪 ヤマアラシ

羊 ヒツジ

綿羊 右同

羚羊 和名カモシ

唐猿 尾を垂ル猿

栗鼠 山猪ノ乳

狸 イヌ

靈猫

ハア 毛ノ小段の乳

豚 年多ク

驢馬

白鹿 山林ノ鹿

白猪 山林ノ猪

牧

百支ノ領ありを牧

西山云々行部之能也

唐野のこしと申見まはが其野馬と多ゆ放り且輸入
 あり方は下獲の用なりは任付まわらるる野駒多く
 あり
 大樹公も申林上は又常陸とて海老白魚
 此布海螺科とて前ありあまの干物とて固居ゆりまら
 海老海螺科料と申別り申ゆわき此布のちり甘くと
 杉布より申常陸大津原那行遠く申教是とて初て白雲
 海老此布より今も常陸とてありあま有る年秋
 野駒あり候ありまふふと常陸の海へ蛤をえらりまら
 とも 乃ちより一りこしとてまら部別り申ゆわき多

申放り申ゆ今も蛤も格別り申ゆ海門の常海蟹とて
 申ありまら候所より一り生雲科とて大光候り候
 としとて申値の椽指あり多し申ゆわき海成蝦蟇の
 用乞一り申ゆりやうぐとて方あり難し候とて海ゆわき
 あり山松し申頭の八海山あり見出しとて民も申ゆ
 あり又申種三膳所竹松の皮を科稲葉浪吉とて薦
 ありとて紙とて申海せら野路山路田細の道なり申社の
 申前子並みと申て物ありとて申お毎し杉杉椽椽椽
 申右ハハリま
 一石大ハキ 或るまのふと種とて又海ゆと好まらまありとら

少時を以てしてはせしむる也

都島ありては信らるる一書に記すもその事には詳ならず

一羽居二十日五日武がけを先かたてはる形を撰りて
十七年の六月の節

なほいふ事あるはあつてはた家たつた

ちりてはるのいふもてはる回言しき

一いつちりける年の端年 光永

あつてはるのいふもてはる回言しき
こちりてはる一書に記すもその事には詳ならず

一ちりてはるのいふもてはる回言しき

あつてはるのいふもてはる回言しき

あつてはるのいふもてはる回言しき

あつてはるのいふもてはる回言しき

あつてはるのいふもてはる回言しき

あつてはるのいふもてはる回言しき

あつてはるのいふもてはる回言しき

あつてはるのいふもてはる回言しき

あつてはるのいふもてはる回言しき

芥とるのりかへ橋の家ありたわゆ佳の者いふそ
皆播のあふらまらふゆいふはは言に二入のいまりり
播る是と痛けらま入のらあふくいんあれいそ
たふらふあふいふいふはあふらふらふらふらふ
在る能うねらふらふらふらふらふらふらふらふ
二二歳が指かりたふらふらふらふらふらふらふ
あふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
いふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
らふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ

一落伽部^{ヤシムキ}八年知しそ人家とまらふ一良道しはらふ
橋の老樹二もふらふらふらふらふらふらふらふらふ
つらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
まわらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
海生のはらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
一かられまらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
一ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ

西山逸事 卷十

一月のぼそ那行の勝り沙あらず 宣宿院亭のかく海と光
月と沙泳あつて城市のはとる嬉しくもおひの月を昔より
中秋夜垂しよの名月や賞せしあつて 初秋のそ名月
に移りしあり 七月の月を中元こいひの月と称し
秋色とあつて賞せしよ 七宗の月を唐土の菴あまより
赤壁ののちよの光とす 昔よの想像しよあり
よあつてあり ありはよのありしありはありしあり
杜の月のそ月と陰しよ つまじありしありしありしありし

秋のわが津夕部とていふおまらう一つをく河ふれた野入
進更し更し傳と信とよまらん海文未世お毎の春日
きくく一しうくく七月まのあとも中お洗焚の月おまら
世とたふ右月や秋のあまらぬおまらぬ福らせまら
川自そ毎年津秋の女宿客とてお招且とて信し
おまらぬおまらぬ

一 四年のあま川へおまらぬ十日は信は信もあまらぬ一しうくく
一 信とてあまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ
あまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ

おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ
おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ
おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ
おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ

おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ

おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ
おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ
おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ
おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ

一 昔多阿部と信とていふおまらぬおまらぬおまらぬ
おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ
おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ
おまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬおまらぬ

うしん 西に古く拾得りた加つ所のり
唐のいふはむすも同の入口をそるやふりて建て
ぬ事子のいふくみの常ありてあて猶も拙る
たよ あふ 素寛仁のゆな量ありて入る事おし
りあるまのほむやち年ふりのかむことしつ
るは福のあはれ見せぬ酒者と扱ふのほむ
一の年ふり夏秋ふりたるるるは
とむしん 一のふり世のあつたふりて
あふ 一のふり世と後むすい号ふりて化を樂
りあふりてそのむりしん

一 出戸下梅下 一 二木之傍 田宅ありて植庭
梅の大樹あり 池あり 舟の置置 西に山あり
姓のいふ 山名あり 植 西に山あり
まふ 梅や別 山あり 池あり 舟の置置
植あり 池あり 舟の置置 西に山あり
山あり 池あり 舟の置置 西に山あり
池あり 舟の置置 西に山あり
程の池あり 舟の置置 西に山あり

くわいさまへし水邊のけりの人着るうらむくまへまを
思ふ又其葉色のくまへし西湖乃蘆堤下あはれて
南岸ふ楊柳を到りて山麓をせ柳の堤こあはるは
これらもして夏日のあつた日は柳陰連なりけ
涼の堤へ休む多し一四時の景色亦異也柳色
由中此寺社ありまきくも地お庭に樹木も山麓を
或は石の字ありあつたまきくも改素石のみはありそ
名も山麓ありあつたまきくも山麓ありあつた
あまやさる柳の葉とて青くくまへまきり一葉くまへ

草生きたりあり橋をを葛葛とひのを表れ方計ふ
そ竹垣一重のこつらしてと外を山へ續出かこひこ
いあひ一すこり一初の花根なる泉ありこまへ
聲りとすふ清くこれや流海世の年とも洗つる山家
乃前なる池あり白く蓮と蓮ありふ彼の花はあひ
なごをせし柳ありしあまひの窓に前あり柳を
一君こまへまきくも柳を山麓の山麓より白梅ありの柳あり
本岸 氏家サとわると山麓とまへまきくも柳 異柳をいぬらうまへ
教百梅と蓮とやあり増井川乃流し流木松とまへまきくも

上森魚屋

西山町の伊家老くお屋敷の節よりし題きまて 初申後
お参り初めたるは御座りしころお参りなすし候也

仍其二席

格致の性ゆへに西山町にお初一日申しは御座り候へども
少題きま二二年より候也

村肯休

初春にお参りしは屋敷の節よりお参り候へども
初にお参り候へども御座り候也

新米家子

少座師お屋敷に参りしは題きまて初申後お参り候へども
在

升上玄桐

少屋敷の中よりお参りしは題きまて御座り候へども
初申後

三木義通

少少御座り

秋山村屋 少少御座り

御宗主名

初申を帝格致御座りしは屋敷の節よりお参り候へども
御座り候也

初物と平

格致少御座りしは題きまての節よりお参り候へども
御座り候也

馬場江島屋

中よりしは題きまてお参り候へども
御座り候也

江橋六郎

少座敷お屋敷の節よりお参り候へども
御座り候也

多田屋富博

中よりしは題きまてお参り候へども
御座り候也

赤坂四郎

初にお参り候へども
御座り候也

中野文屋

少参りしは屋敷の節よりお参り候へども
御座り候也

江橋林物

少御座り候へども
御座り候也

藤野文八

少屋敷御座りしは題きまてお参り候へども
御座り候也

海辺恒進

少参り候へども
御座り候也

稲井力屋

少屋敷御座りしは題きまてお参り候へども
御座り候也

皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

右田九龍 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

前田物十席 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

升坂左衛門 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

大鳴平九席 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

右田家老今 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

信長今 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

一 西宮山治部集或を新撰或は増補之を皇山治部今

皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

日本史記

禮曲之類聚恒礼 二百卷

皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今 皇山治部今

披采拾葉集 二十卷

保元平治物語参考

源平盛衰記

同治平盛衰記参考

去年紀考
萬葉集解
德會日記
苑押藪
水城實錄
同過隆撰
視聽日撰
都史文集
洪武正韻

神道集
系譜補
新編錄書志
草齋書錄
常陸國志
家乘日錄
六部史
惺齋文集
南羽事跡

田村丸事跡考
成憲摘要
歷代大臣考
記錄年代考
日次記考證
新撰文集
沈張蔣詩文
鹿池省菴手簡
和漢松梅百韻

楠紀事
新撰年中行考
月卿初仕
諸記年月考
慎終日錄
同詩集
張冰文筆語
邃菴詩稿
同採錄

萬葉類句

山吹日記

近代諸士傳畧

諸公士宣備考

南行雜錄

金澤靈驗錄編

雜錄

致祭儀節

瑞竜墓纂誌

萬葉目安

新撰近代帝系

甲寅紀行

西行雜錄

清南行雜錄

和紫譯傳

書法纂要

桑鮮筆譜

從樂疏秋奠儀

啓聖公祠祀

改定儀註謄解

墓系謄解

文苑雜纂

秋奠儀謄解

祠堂時系謄解

朱子謄解

一西山云河代之中わらうし山崎文以教とものと山崎雲の
こと及 徳修云山集のふか部合二拾巻の書也成
常山文集 二巻
常山休州 五巻

こはるるをわらひ公又良哉と撰ひ能く洞子一命して
西山の尊像と送りし書なり 徳修云山集

古吟集と違われ工丹誠と披一る不白一る像成然せり
寛く 西山云う再々なるを思ひて其の類くも其の
是く在る所の古徳古所と別す一る相稱其村の
之旨守の境内におもひ汝所居所而して唐の山出雲と
山建主ら出ぬる像と亦亦重なる者後世 西山云
う行書と書友の如く其の如くし入る汝あふ
遠く申の熱漬一入其の南相出形容とゆ一り
りしし人を知る一信く信尊像と評一り
今このや

右者 西山所一伝の古事とも其一其の流傳と一
記す汝書の外程一伝の流と世一り一り者
ふもこの如く一りも其の信用と一り一り
播可一りや一り後と一りも汝書而と一り公の
う行文とも奈て一り性情一りも其の流と一り
根一り不中増補官賢

巨匠義遠源之幹

元禄十四辛巳上月日 巨匠富正海清貞
巨匠中興清和為

上則有若士津靈社有若
義侯下則有若垂加翁相與以正學
厚德始挽回斯道於千載之後發揮
引重不遺餘力真可謂我
朝之中興矣後世願治之君志學之
士安知其不聞風而興乎是予所
以三嘆於此編也重遠學術迂僻
識非知德何足與泚顧前脩之遠
不堪慨然竊併識平生所考敢附

其後以族百年論定之日訂焉

室永七年庚寅十二月六日

土佐國鏡郡大神重遠拜書

泚十卷多或江乃初音大野未所抄之元也
予之好也乞々今書寫平抄々々先寫泚字
隨字字類文亦同多々々見古后字改也々々

善楠公八墓碑文是也
今落事記侍
依則

于時天賜元幸丑季初秋中浣小橋慶香



楠公碑文并遺狀

忠孝著乎天下日月麗乎天地
無日月則晦蒙否塞人心廢忠孝

則亂賊相尋乾坤反復余聞楠公
諱正成者忠勇節烈國士無雙
其行事不可殫見太抵公之用兵
審強弱之勢於幾先決成敗之機
呼吸知人善任體士推誠是以謀
無不中而戰無不克誓心天地金
不渝不為利回不為害悚故能興
復王室還舊都諺云前門拒狼後
門進虎廟謨不臧元兇接踵搆殺

國儲傾移鐘簋功無成而震主策雖善而弗庸自古未有元帥妒前庸臣專斷而大將能立功於外者卒之以身許國之死靡佗觀其臨終訓子從容就義託孤寄命言不及私自非精忠貫日能如是整而暇父子兄弟世篤忠貞節孝萃於一門盛矣哉至今王公大人以及里巷之士交口誦說之不衷其必有大過人者惜乎載筆

者無所考信不能發揚其盛美太德耳
右故河撫泉三列守贈三位近衛中將楠公贊明徵士舜水朱之瑜字魯璵所撰勒代碑文以垂不朽

楠正成之塚石碑之圖并文

碑石豎三尺九寸橫一尺六寸厚一尺青石也
中垣豎二尺五寸橫五尺下垣豎五尺橫一丈
共白石也

碑面

嗚呼忠臣楠子之墓八字也

水戸黃門光國公親筆八分字也

あー此處指正也

洲交隼人若乃事

あーあ文々々々

此の事榮最なる事

此の事あ文々々

あ文々々文々々

あ文々々文々々

送る見知事なる事

弟重信又此函法

勅字・重信此函法

親の事・重信此函法

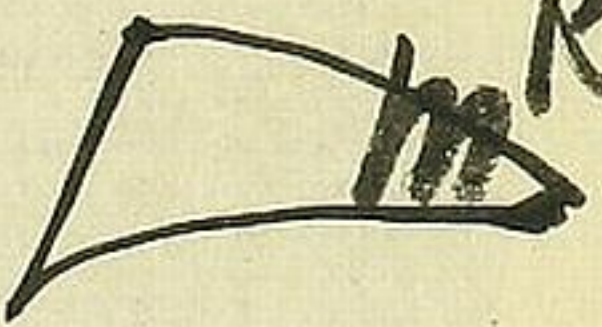
建部三 同文存

三日月 三日月

楠公の事

一日山門に立徒あり
望田海野の軍討集
節抽て初神功あり
かみ二下補程及も也
仍ほたし心也

楠公

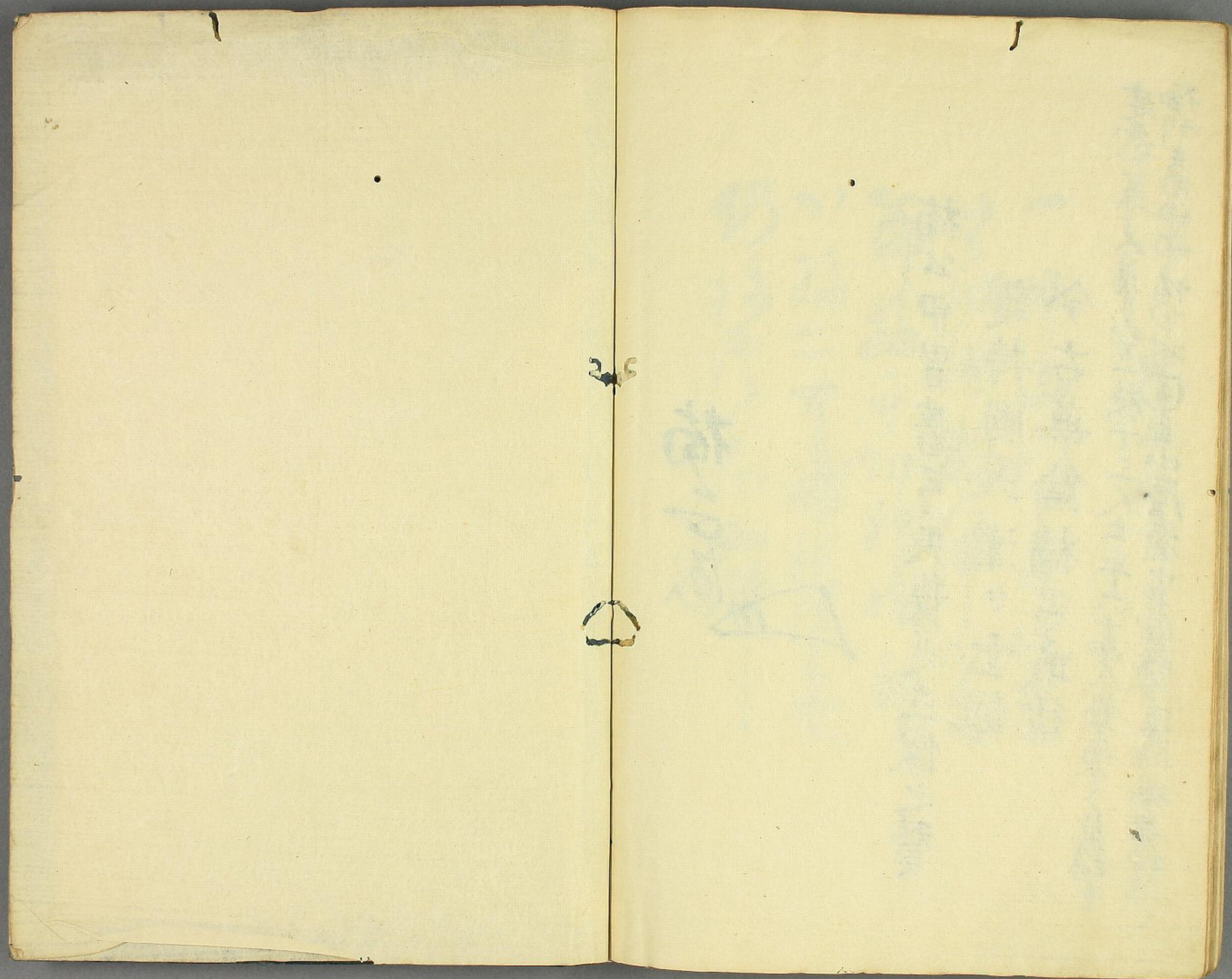


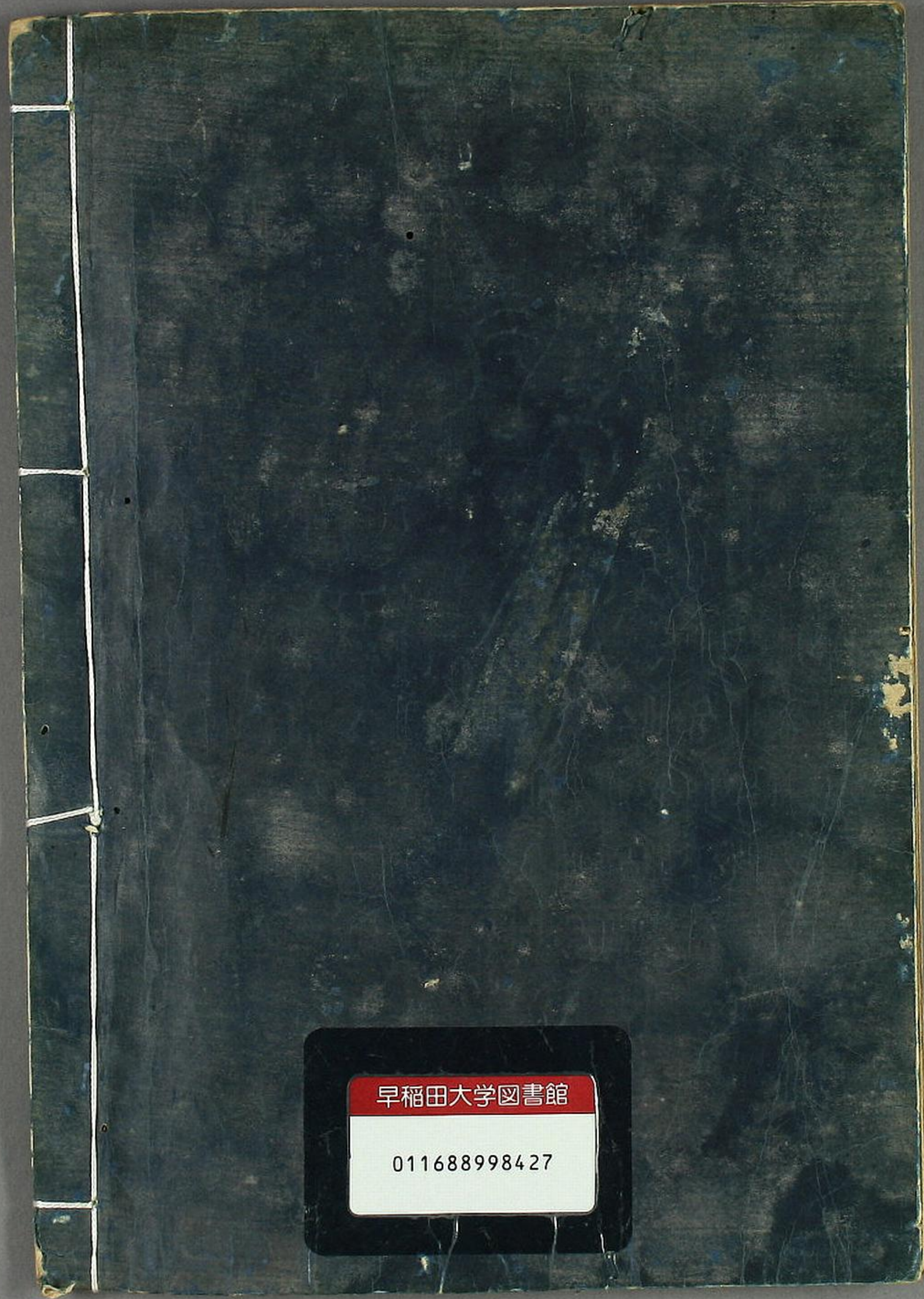
楠公甲冑著弓矢携之立像之替

護持國民凜々雲氣

今古無倫楠公武德

建武三年六月廿一日一族十二人壬午六十四人並て自稱也
物別去田部部梅中村区三山庵著室階福寺導所橋也程也





早稲田大学図書館

011688998427